



# 経験から 学ぶこと

川崎ゆきお

「昔の記憶とね、今の出来事とが重なることがあるんだ」

「長年経験を積んでこられたので」

「いや、若い頃からだ。子供の頃からな」

「そうなんですか」

「以前にも似たようなことがあったなあ、と思いながら、今のことにあたっておる」

「そこに先生の知恵の源泉があるのですね」

「わしは湯元か」

「いえいえ」

「これはねえ、同じ筋だから、以前と同じように処理すればいいということではない」

「はい」

「ただ、重ねながら、頭の隅に入れる。頭の中に目があってねえ、ちらっちらっと、それを見ながら考える」

「昔の経験が参考になるわけですね」

「くどいが、それは子供の頃からののでね、昔と言ってもそんなに古いことじゃない」

「要は経験に照らし併せて物事を判断すると」

「それは違うかもしれんなあ」

「はて」

「それなら年寄り全員知恵者だろ」

「実際そうでしょ」

「止まってしまった人もおるだろ。そちらの方が多いぞ。何故かという、もう面倒になったからだ。いちいち考えるのが」

「でも経験は大事でしょ」

「わしが言う経験を参照にすると言うのは、そういうことではない」

「ではどう言う」

「言う限りは筋がある。お話がある」

「ストーリーですね」

「しかし、そういう物語ではなく、印象なんだなあ」

「はあ」

「印象にはさほど論理はない。ただ思い付いただけでな」

「それは何でしょう。どの辺りのお話になりますか」

「経験ではなく印象なんだな」

「過去の印象ですね」

「過去と言うほど古くはない。昨日のことでも、一時間ほどの前も加わる」

「昨日なら、年齢に関係なく、それは経験してますねえ」

「だから経験ではないと言ってるだろ」

「はい」

「その印象とはね、パターンであり、リズムであり、テンポでもある。また臭いでもあり、肌触

りでもあり、空気感でもある」

「抽象的ですねえ」

「いや、すごく具体的だよ、君」

「しかし、先生、それは」

「そう。本人にしか分かん」

「ああ」

「勘が働くとはそのことなんだな」

「それは伝授不可能なのですね」

「だから、君に伝えても、無駄なんだ」

「じゃ、僕も聞いても分からないと」

「そうだね」

「それは勘の良さですか」

「さあ、そこまで考察したことはないがね、これは止めが入るんだ」

「止めとは」

「うん、そうだね、きな臭さと胡散臭さの間ようなものが脳裏に出る。映像じゃないよ。脳裏でそんなもの見ているわけじゃない。たまには出るがね。昔見た蛸とかね」

「では、昔の記憶が重なるとは」

「絵のように重なるわけじゃない。物事にもよるが、それが臭いであったりする。ああ、またあの同じ臭いが来ているなあ、と」

「それを参考にするわけですね」

「それはねえ、以前はそのとき、こうして解決した。だから、そのときと同じ動きをしよう。などという単純なことだといいたがね。そうじゃない。あくまでも参照、参考程度だな」

「では、あまり実用性はないと」

「まあ、自分が今何処にいるのかが分かる程度かね」

「はい、分かりました」

「解答など転がっていないからね、君」

「肝に銘じます」

「どの肝だ」

「はあ」

「肝臓か」

「あ、いえ、別に」

「そうか」

了